

なぜ危機言語を維持すべきなのか ―沖縄語の親族名称「ウunnai」の意味と用法をめぐって―

Why Should We Preserve Endangered Languages? Evidence from an Okinawan Kinship Term “Unai”

町田 星羅¹⁾・松井 真人²⁾

MACHIDA Seira and MATSUI Mahito

1) 宇都宮大学大学院国際学研究科国際交流専攻博士前期課程

2) 山形県立米沢女子短期大学英語英文学科

要旨：本稿は、日本の危機言語の一つである沖縄語に焦点を当て、沖縄語維持活動の現状と問題点、及び危機言語を維持すべき理由について考察した。危機言語を維持すべき理由については、特に沖縄語の親族名称「ウunnai」を取り上げ、その語の意味や用法に反映している沖縄文化固有の親族観や女性観を明らかにし、特定の民族の文化的知識が持つ普遍的価値及びその種の知識を継承することの重要性という観点から論じた。

キーワード：危機言語、沖縄語、維持、親族名称、ウunnai

1. 序論

キリスト教信仰に基づく非営利団体SIL Internationalが公開しているEthnologue第22版（2019年版）（以下Ethnologueと略記）の統計によると、世界で7,111の言語が話されている⁽¹⁾。そして、そのうちの2,895の言語が消滅の危機にあるという。これは全言語の約41%に当たる。また、UNESCOが公開しているAtlas of the World's Languages in Danger（2010年オンライン版）（以下Atlasと略記）によると、世界で話されているおよそ6,000の言語のうち2,572の言語が消滅の危機にあり、この数には1950年以降にすでに消滅した228の言語も含まれている⁽²⁾。2,572の言語は、全言語の少なくとも43%に当たる。以上の言語数は、SIL InternationalとUNESCOがそれぞれ独自に定めた、言語と方言を区別するための基準や危機度の尺度に基づいて算出されたものである。実際には未調査の地域があるということや、言語と方言を理論的に区別することができないことから、言語の総数は正確にはわからない（唐須2007）。危機言語の数もまたしかりである。しかし、異なる2つの組織によって行われた言語調査の結果がいずれも、世界の約4割の言語が危機言語であることを示していることから、現時点で相当多くの言語（おそらくは4割程度の言語）が消滅の危機にあることが強く推測できる。

⁽¹⁾ Ethnologueが採用している言語認定の基準は、ISO 639-3（個々の言語を表すための3文字からなるコード）で採用されている、特定の変種を一つの言語として認定するための基準である。その基準は3つあり、概略以下の通りである。(1) 2つの変種の一方の話者が機能的なレベルで（他方の変種を学ぶことなく、自分の変種についての知識で）他方の変種を理解できるのならば、それらは同じ言語の別々の変種である。(2) 2つの変種間の相互理解可能性がわずかであっても、それらが文学を共有していたり、両方の話者が理解できる中心的な変種に対する民族言語的なアイデンティティを共有していたりする場合は、それらは同一言語の別々の変種である。(3) 2つの変種が相互に理解可能でも、長期に渡って別々の名前が与えられている民族言語的なアイデンティティ及び十分な標準化、文学がそれぞれにあるのならば、別々の言語である。

⁽²⁾ Atlasは、Ethnologueなど危機言語に関する複数の文献に基づいて言語総数を推定している。

では、日本の危機言語の状況はどうであろうか。Ethnologueでは、日本で使われている15の言語（手話も含む）のうち、表1の12つの言語が危機言語に認定されている。

表1 Ethnologue（2019年版）が認定する日本の危機言語

危機度	言語
Shifting	北奄美語（Amami-Oshima, Northern）、南奄美語（Amami-Oshima, Southern）、喜界語（Kikai）、国頭語（Kunigami）、沖永良部語（Oki-No-Erabu）、中部沖縄語（Okinawan, Central）、徳之島語（Toku-No-Shima）、八重山語（Yaeyama）、与那国語（Yonaguni）、与論語（Yoron）
Moribund	宮古語（Miyako）
Nearly extinct	アイヌ語（Ainu）

Ethnologueは、言語が消滅する危機度を15段階の尺度で示しており、宮古語以外の琉球諸語は危機度が上から5段階目のShiftingのレベルであり、これは「子育てをしている世代は自分たち同士で当該の言語を使うことができるが、その言語は子どもたちには伝えられていない」という状況である。それより危機度がもう一段階深刻な宮古語はMoribundのレベルであり、これは「当該の言語を積極的に使用する者が、祖父母の世代あるいはそれより上のメンバーだけになっている」という状況である。

一方、Atlasでは表2の8言語が危機言語に認定されている。

表2 Atlas of the World's Languages in Danger（2010年版）が認定する日本の危機言語

危機度	言語
definitely endangered	奄美語（Amami）、八丈語（Hachijō）、国頭語（Kunigami）、宮古語（Miyako）、沖縄語（Okinawan）
severely endangered	八重山語（Yaeyama）、与那国語（Yonaguni）
critically endangered	アイヌ語（Ainu）

Atlasは6段階の尺度で言語の危機度を示している。八重山語と与那国語以外の琉球諸語は、上から4段階目のdefinitely endangeredのレベルであり、これは「子どもたちがもはや当該の言語を家庭内で母語として習得していない」ことを意味する。八重山語と与那国語はそれより危機度がもう一段階深刻なseverely endangeredのレベルであり、これは「当該の言語が祖父母かそれより上の世代によって話されている。親の世代はその言語を理解できるかもしれないが、子どもたちに対して、あるいは同世代同士でそれを話さない」という状況である。

EthnologueとAtlasでは言語の分類の仕方が異なるため、両者の日本における危機言語数は異なるが、アイヌ語と八丈語以外のすべての危機言語が琉球諸語であることは一致している。3.2で詳しく見るように、近年、琉球諸語の維持・普及活動が活発に行われているが、各家庭における次世代への継承はほとんど行われておらず、その危機的な状況は大きく改善されてはいない⁽³⁾。以下の章では、そのような状況にある琉球諸語の一つである沖縄語の維持活動の現状と問題点、沖縄語をはじめとする世界中の危機言語をなぜ維持すべきか、どうすれば維持できるかということを、沖縄語の親族名称「ウツナイ」に焦点を当て、言語による文化的知識の継承の重要性という観点から考察していく⁽⁴⁾。

⁽³⁾ 本稿では、琉球諸語を方言ではなく言語と見做すが、その理由は第2章で述べる。

⁽⁴⁾ 「ウツナイ」の表記は「キナイ」「をなり」など様々あるが、本稿は、他の文献からの引用の場合を除き、『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』に従って「ウツナイ」と表記する。

2. 沖縄語の概要

2.1 沖縄語の定義

本章では、本稿の考察対象となる沖縄語の定義と現状について述べる。沖縄語が話されている地域は、沖縄本島の中南部で、その境界は恩納村・金武町と読谷村・うるま市との間の地峡となっている。また近隣諸島では、沖縄本島の西沖にある慶良間列島、粟国島、渡名喜島、久米島のことも沖縄語に含まれる（新永他2014）。沖縄語は、日本語とその系統関係が言語学的に証明されている琉球諸語もしくは琉球列島諸方言の一つに分類される。これらのことばを言語とするか方言とするかの明確な基準はないが、『日本語大事典 下』の説明では、昭和初期に方言学の基礎を作った北条操が日本語を内地方言と琉球方言に大別して以降、この方言区分が採られるようになったという。

内地方言と琉球諸方言は同一の祖語を持つものの、互いに意思疎通を図ることは困難である。その通じない程度は同じ祖語を持つドイツ語と英語以上の隔たりがある（外間2000）。さらに奄美、沖縄、宮古、八重山、与那国の方言群は同じ琉球諸方言から派生しているものの、この方言間もまた互いに意思疎通を図ることが困難である。また、この5つの方言群はさらに下位に区分されるが、これ以下の区分に至っては見解が異なり、統一された区分はない。

『日本語大事典 下』に従うならば、沖縄語は琉球諸方言の北琉球方言、さらに下位の沖縄方言のうち沖縄中南部方言に区分される。沖縄北部方言と沖縄中南部方言の境界は本島西海岸の恩納村仲泊と恩納、東海岸の石川と屋嘉の間あたりとなっている。また、一般の人々の間でも沖縄中南部及び近隣諸島で話されていることばは久しく「方言」と認識されてきた。しかしこうした区分は、少数言語や危機言語が注目されるに従って見直されつつある。『言語学大辞典 第4巻』では、方言学者がこれらを方言と区分することに対して、内外の学者にはそれを独自の言語とみなす例が少なくないことに言及している。しかし琉球諸語あるいは琉球諸方言が経験した歴史的異質性及び行政上の理由から、これらのことばは方言と見なされてきたのである。

また、第1章で見たようにAtlasは、琉球諸島における奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の6つのことばを独立した言語として認定し、そのすべてを危機言語に認定している。このことについてUNESCOの担当者は、「これらの言語が日本で方言として扱われているのは認識しているが、国際的な基準だと独立の言語と扱うのが妥当だと考えた」と発言している（朝日新聞夕刊2009年2月20日）。またEthnologueでは、上記の他に北奄美語、南奄美語、喜界語、沖永良部語、徳之島語、与論語が区分され、琉球列島には11の言語が認められている。さらに宮良（2010）は、沖縄語が方言と見做されてきたのは国家イデオロギーによるものであり、民族性や正書法、語形成や文構成のレベルから分析すれば、独立した言語であると指摘している。

以上のように、あることばを言語とするか方言とするかの絶対的な基準は存在しないのであるが、沖縄語は歴史的、行政的な理由から方言と見做されていた。しかし近年この区分が様々な観点から見直され、沖縄語を含む琉球諸語を独立した言語と見做することが主流となっている。本稿もAtlasやEthnologueの定義に従い、言語復興の立場から、沖縄本島中南部とその近隣離島で話されている言語を「沖縄語」と統一して呼ぶこととする。

2.2 沖縄語の現状

本節では沖縄語の現状について述べる。沖縄語が話されている地域の人口は約123万人で、日本の人口1億2625万2千人（2019年6月総務省統計局確定値）の1%程度に当たる。沖縄語の話者数については算出が難しいところではあるが、新永他（2014）に、話者を戦前生まれの者と仮定して算出した数がある。しかしその数は2007年の「100の指標からみた沖縄県のすがた」（沖縄県統計協会）に依拠したものでありやや古いので、本稿では2019年1月の「住民基本台帳年齢階級別人口、人口動態及び世帯数」（総務省）から新たに算出を試みた。表3に話者の分布地域の詳細と人口を示す。

表3 沖縄語が話されている地域の人口

	総人口	75歳以上人口	75歳以上人口割合
那覇市	322,624	36,770	11.4%
沖縄市	142,217	13,746	9.7%
うるま市	123,976	12,942	10.4%
浦添市	114,531	10,442	9.1%
宜野湾市	98,689	9,067	9.2%
糸満市	61,811	5,871	9.5%
豊見城市	64,436	5,265	8.2%
南城市	43,945	5,493	12.5%
読谷村	41,446	4,304	10.4%
西原町	35,322	3,186	9.0%
南風原町	39,348	3,211	8.2%
北谷町	29,097	2,777	9.5%
八重瀬町	31,338	3,131	10.0%
北中城村	17,345	1,922	11.1%
中城村	21,284	1,975	9.3%
与那原町	19,810	1,783	9.0%
嘉手納町	13,681	1,745	12.8%
久米島町	7,873	1,218	15.5%
座間味町	942	118	12.5%
粟国村	701	157	22.4%
渡嘉敷村	725	86	11.9%
渡名喜村	378	98	25.9%
合計	1,231,519	125,307	10.2%

平成31年1月住民基本台帳年齢階級別人口を基に本稿筆者作成

新永他（2014）が示した2007年のデータでは、この地域には総人口約114万人の約15%にあたる17万人程度の沖縄語話者がいると推定されていた。しかしそれから12年後の2019年現在、沖縄語の普及活動は新たな話者を生み出すほどの成果を上げていない。戦前生まれの75歳以上の人が仮に沖縄語を話すことができるとすると、現在この地域の総人口約123万人に対し沖縄語話者は約10%の12万人程度ということになる。この間の減少率は33%であり、早急な対応が必要である。しかしそれでもかつての王国の首都である首里や後に経済の中心となった那覇のことばを内包していることや、人口の最も集中している地域のことばであることから、沖縄語は他の琉球諸語と比較すれば相対的に力があり、多くの話者を抱えている言語と見ることもできる。

言語の危機度や活力を測定することは難しいが、いくら琉球諸語の中で有力な言語であっても沖縄語が危機言語であることに変わりはない。というのは、言語の危機度は絶対的な話者数では測れないからである。10万人の話者がいようと、100万人の話者がいようと、その言語が高齢者の間のみで話され、世代間で継承されず新しい世代の言語シフトが完了していれば、その言語は半世紀もしないうちに消滅してしまうだろう。『世界言語百科』では、言語の危機度を計る基準としてUNESCOが挙げた9つの基準の中で「当該言語は、次世代に引き継がれているか」という基準が重要であることを述べている。この基準から

沖縄語を含む琉球諸語の世代間継承を見ると、石原（2010）が行なった調査では5段階評価の上から2番目「主として祖父母世代かその上の世代に使用される」という結果が出ている⁽⁵⁾。また新永他（2014）が沖縄語の中の首里のことばを対象に行なった調査では、世代間の継承について5段階評価の上から2番目「祖父、祖母などの世代だけが話す」という結果が出ている。さらに第1章で見たように、沖縄語に対するEthnologueの評価はShifting「子育てをしている世代は自分たち同士で当該の言語を使うことができるが、その言語は子どもたちには伝えられていない」であり、Atlasの評価はdefinitely endangered「子どもたちがおもはや当該の言語を家庭内で母語として習得していない」というものである。つまり沖縄語は既に継承が途絶えた言語であり、今効果的な策を講じなければ現在高齢となってしまった話者とともに途絶えてしまうことが分かる。

3. 沖縄における言語政策と言語維持活動

3.1 言語政策

前章では沖縄語の危機的な現状を説明したが、本章では沖縄語がこのような状況に至るまでの言語政策の歴史と、現在の言語維持活動の状況について述べる。

日本の明治維新後、琉球王国は1872年に琉球藩とされ、1879年に廃藩置県を迎える。そして廃藩置県以降に標準的な日本語による言語教育が始まるが、その時期の沖縄における言語使用は重層構造を成していた。つまり、まず各地の地方のことばがあり、その上に共通語としての首里語・那覇語があり、その上に日本語がかぶさっている状態であった。

外間（2000）によると、沖縄のいわゆる「日本語」教育においては、東京の言葉は「普通語」、「標準語」そして「共通語」というように、その名称が歴史的に変化していった。外間は廃藩置県以降の沖縄における言語教育の歴史を、それぞれの名称が使われた時期に対応させて、4つの時期に分けて説明している。

第1期は「東京の言葉」時代（1879年-92年頃）である。県庁の中に後に師範学校に吸収される会話練習所が設置され、教科書として『沖縄対話』が発行された。ここから徐々に沖縄のことばに対する意識が変化し、日本語化が推し進められることとなる。

第2期は「普通語」時代（1892年頃-1935年頃）であり、共通語（東京語）に対する個人的な関心が、社会的関心にまで高められた。政府の共通語教育の推進といった外的要因のみならず、沖縄移民が移民先で衝突する言語差異による苦悩や、新教育の普及による社会的自覚といった内的要因も働いた。この内的要因について外間が「特に沖縄側からいえば、社会的後進性を払拭して近代化を進めていくためには、どうしても必要な社会的要請でもあった」と記述しているように、内側からの力は外からの圧力と絡み合い、後に方言札の使用のような異常なまでの方言撲滅運動や標準語励行運動につながっていく。

第3期は「標準語」時代（1935年頃-55年頃）で、言語政策が軌道に乗った時代である。昭和15年には標準語励行運動が県の方針の一つとなり、これが方言論争を引き起こした。方言札が再び教育現場で使用され、当時の札をかけられた恥ずかしさや言語教育から、未だに人前で自身の母語を話すのに引け目を感じるお年寄りはいくつかある。

そして第4期が「共通語」時代（1955年頃-現在）である。この時代に標準語に代わって共通語という用語が使われ始めた。これは国立国語研究所が作り出した仮説的な概念語で、語彙、語法、音声、アクセント等の面で多少の地域性を帯びた「全国どこでも通ずる言語」を指す。この時期の27年間にも及ぶアメリカ統治下においても、沖縄の言語教育における日本語化の波は止まることを知らなかった。

以上のような言語政策の歴史を経て、沖縄語を含む琉球諸語は衰退の一途をたどった。廃藩置県、近代国家への併合、経済の疲弊やそこからくる劣等感やアイデンティティーの揺らぎは、この言語を衰退させるには十分すぎる要因となっている。

⁽⁵⁾ この調査は沖縄語のみを対象としているのではなく、琉球諸語を総括した調査である。

3.2 言語維持活動

こうした琉球諸語の現状が、これまで見過ごされて来た訳ではない。文化庁はAtlasによる琉球諸語に対する危機言語認定を受け、国内の危機言語・方言に関する実態調査を研究機関に委託し、その保存・継承を目的とする「危機的な状況にある言語・方言サミット」を2015年から毎年行っており、研究者と行政の情報共有や課題解決のための研究協議会を開催している。沖縄県は県内各地で話されて来たことばを「しまくとぅば」と呼び、これを「地域の伝統行事等で使用される大切なことばであるとともに、組踊や琉球舞踊、沖縄芝居といった沖縄文化の基層であり、いわばアイデンティティーのよりどころ」であると、その普及、継承を図るため2006年に9月18日を「しまくとぅばの日」とする条例を制定した⁽⁶⁾。また2013年には「しまくとぅば県民意識調査」を行い、この結果を基に、しまくとぅばの普及推進を戦略的かつ効果的に行うための「しまくとぅば普及推進計画（平成25年～平成34年）」という10年計画を策定している。また2017年には文化振興課内に「しまくとぅば普及センター」が設置され、関連機関、団体と連携しながら普及の中核的機能を果たすため、しまくとぅばを学びたい人への情報提供、人材育成、普及ツールの作成などを行っている。さらに民間団体やメディアによるしまくとぅば普及の取り組みも多数報告されており、行政、民間ともにしまくとぅばの継承に力を入れていることが分かる。

沖縄語に関していえば、民間団体として沖縄語の保存・継承・普及に関する事業を行い、沖縄文化の継承・発展を目指す「NPO法人 沖縄県沖縄語普及協議会」、沖縄に伝わる昔話・民話を管理・保存し積極的な活用を図っている「NPO法人 沖縄伝承話資料センター」、その活動の一環となる青少年の人材育成事業として、しまくとぅばの普及活動や子供の居場所づくりなどに取り組んでいる「沖縄ハンズオンNPO」など他にも多くの団体が活動している。その他に近年では民間企業の取り組みや、個人が作成した市町村特有のしまくとぅば教本、言語辞典、絵本などもある。沖縄語の継承推進活動は徐々に広がりを見せている。しかし2.2で見たように、その活動が話者数の増加につながっていないことも事実である。

4. 危機言語を維持すべき理由

危機言語の話者とその維持活動者の間に、危機言語を維持すべき理由について明確な共通理解がなければ、その活動は成功しないと考えられる。そこで本章では、沖縄語を含む世界中の危機言語を維持すべき理由について、これまでの先行研究を踏まえながら説明する。危機言語を維持すべき理由について考察している文献は、Crystal (2000)、Nettle and Romaine (2000)、Evans (2010)、Harrison (2010)、Thomason (2015) など数多くある。例えば、Crystal (2000) はこの問題について一つの章を当てて考察しており、5つの理由を挙げている。以下にその概略を述べる。

1つ目は「多様性が不可欠だから」という理由である。人類が地球上の様々な環境の中で生きるためには、それに適応するための多様な文化が必要である。文化は主に当該の言語によって伝承されるので、文化の多様性を保つために言語の多様性が必要であるというわけである。

2番目は「言語はアイデンティティーを表現するから」という理由である。ここで言うアイデンティティーとは、共同体のメンバーを同種の人々 (the same) たらしめている要因のことである。これは、身体的外見だけでなく、地元の慣習、信仰、儀式、個人の行動全体に関係している場合も多く、そのような人間的な活動の中でも、言語は最も普遍的なものである。したがって、言語はアイデンティティーの主要な指標や象徴や記録になりうるというわけである。

3番目は「言語は歴史の宝庫だから」という理由である。民族の起源や発展は言語によって記録されている。たとえ書き言葉がない場合でも口頭伝承者 (oral performers) によって民族の記憶が口頭で伝えられている。したがって言語が失われると、過去とのつながり、すなわち歴史が失われてしまうことになる。

4番目は「言語は人間の知識全体に貢献するから」という理由である。文学、物語、神話、伝説、伝統

⁽⁶⁾ 沖縄県 (2017更新) 「しまくとぅば普及推進計画」及び「しまくとぅば普及推進行動計画」について」

や慣習についての説明、その他の多くの文化的知識がその文化の言語によって新しい世代に伝えられる。この文化的な知識には、動物相や植物相、岩や土壌、気候の周期とそれによる土地への影響、地形の解釈、自然力のバランスなど生態環境についての知識が含まれている。以上のような知識は当該文化の言語によって次世代に伝えられ、それによってしか完全に表現できないので、そのような知識を学ぶには当該の言語を維持して学ぶしかないということになる。

5番目は、「言語はそれ自体興味深いから」という理由である。これは、人間の言語能力の性質を包括的、明示的に定義するという、言語学の目的に関連している。つまり、それぞれの言語は、独自の音声、文法、語彙の構造を持っているが、人間の脳がどのような種類の言語の構造を生み出しうるのかということを知るためには、できるだけ多くの言語を調べなければならない。したがって、言語が消滅することは、言語学の目的にとって大きな脅威になるというわけである。

以上がCrystal (2000) が挙げている危機言語を維持すべき理由であるが、考えられうる重要な理由はこれらの中にすべて網羅されていると考えられる。これらの理由を大きく分類すると、次の3つに分けることができる。

1. 民族的アイデンティティーの維持
2. 文化的知識の継承
3. 人間の言語及び認知能力に関する研究の促進

これら3つの理由のうち、以下の章で主に取り上げるのは2の理由である。そこで、次章で沖縄語の親族名称と文化的知識との関係について考察する前に、言語と文化的知識の一般的な関係について述べておく。人間は地球上の多種多様な環境に適応して生活するために、食料、住居、衣服、気象、地形、動物、植物、狩猟、農耕、漁労、人間関係など様々な事柄についての民族固有の文化的知識を持ち、それらを利用している。もちろんそこに言語も含まれている。なぜならば、そのような文化的知識は主に言語によって次世代に伝えられるだけでなく、言語、特に語の意味の中に文化的な知識が含まれているからである。

民族固有の文化的知識を反映した語彙の研究は、これまでも数多くある。例えば日本語では、「いき」の意味分析をした九鬼 (1979)、「甘え」という概念を分析した土居 (1971) が有名である。また英語に関しては、Wierzbicka (2006) がright, wrong, reasonable, fairの文化的意味について分析しており、Wierzbicka (1997) は、英語、ロシア語、ポーランド語、ドイツ語、日本語における様々な語の意味分析を行っている。例えば日本語に関しては、日本文化特有の概念をコード化している語として「甘え」、「遠慮」、「和」、「恩」、「義理」、「精神」、「思い遣り」という7つの語が意味分析されている。

以上の先行研究は、日本語や英語など比較的話者の多い言語についてのものであるが、危機言語の語彙についてはどうであろうか。これについては、Evans (2010)、Harrison (2010)、Nettle and Romaine (2000)、Thomason (2015)、山田 (1994) などに、少数民族の文化的知識を反映した語彙の実例が多数挙げられている。それらは、気象などの自然現象、動物相、植物相に関する語彙が多く、民族固有の生態学的な知識を含んでいる。以下にその実例を挙げておく。

Harrison (2010) によると、アラスカ、アリューシャン列島及びシベリアに住むユピク族は、自らの生活環境における雪や氷についての知識を彼らの言語の語彙に取り入れており、少なくとも99種類の海水の形状を識別して、それに呼称をつけている。例えば、次のような情報を含む語がある⁽⁷⁾。

⁽⁷⁾ Harrisonはこれらの語の意味を、Conrad Oozeva et al. *Watching Ice and Weather Our Way*, ed. Igor Krupnik et al. (Washington, DC: Arctic Studies Center, Smithsonian Institution, 2004). から引用している。

Qenu まだ新しい雪泥。最初の寒気到来のころにできる。

Pequ 圧力隆起によって氷が盛りあがる状態。膨張した部分が割れて崩れると、その下の海水が現れる。それからふたたび新しい氷か雪に覆われたものなので、歩くのは非常に危険。この状態の場合は迂回したほうがいい……。

Nutemataq 古い氷盤で厚みがあり、かなり長い期間が経過していると思われる雪塊が載っている。歩いても安全。

Nuyileq 砕氷で、解けはじめている。歩くのは危険。解けはじめてはいるがまだ水になっていない状態で、もろいので割れて水中に落ちる危険がある。水が入り込むようになるため、アザラシが氷上に現れることがある。

Harrison (2010) 川島訳 (p.85)

このようなユピク族の語彙が、ユピク族以外の人々に対して持つ普遍的な価値に関してHarrisonは次のように述べている。

ユピク族が氷や雪について知っていることは、私たち人類の共有財産でもある。北極圏の気象状況に関する比類なき知識の宝庫には、北半球に深刻な影響を与えている極端な地球温暖化を理解し、適応するための鍵が隠されているかもしれない。ユピク族の雪や氷に関する知恵を無視すれば私たち自身を危険にさらすことになる。その複雑さと歴史を認めれば、大きな利益になるはずである。

Harrison (2010) 川島訳 (pp.84-85)

次に食糧資源についての文化的知識をEvans (2010) から挙げておく。メキシコのバハ・カリフォルニアに住む500名ほどの人々によって話されているセリ語という言語がある。研究者がこの言語の語彙を記録した時に、話者たちがアマモ (eelgrass) という海草を穀物として利用していることが明らかになった。アマモは淡水や農薬や肥料なしで収穫でき、人類の食糧資源としてかなりの潜在的価値を持っている。セリ語の多くの語彙には、アマモの扱い方や、アマモから作られる産物、アマモの収穫についての情報が含まれている。例えば、セリ語で4月は*xnois iháat*と呼ばれ、これは「アマモ収穫の月 (moon)」を意味する。また、アマモの収穫期の始まりは、コクガン (black brant bird) という鳥がアマモを食べるために海に飛び込むことから分かるので、セリ語でコクガンは*xnois cacáaso* (「アマモの種子の予言者」) と呼ばれている。

本章では、危機言語を維持すべき理由について、先行研究に基づき、民族固有の文化的知識の継承という観点から検討した。文化的知識は一見すると当該の民族だけに有益であるように思えるが、前述のユピク語やセリ語に含まれる自然現象や植物相に関する知識のように、人類全体にとって有益なものとなりうる知識も多くある。また、危機言語の語彙だけでなく、reasonable、fair、「和」、「恩」、「義理」、「思い遣り」といった英語や日本語の語彙も、もし当該の民族だけでなく、その他多くの人々がそれらの語が表している物の見方や振る舞い方を知っていれば、日常生活、ビジネス、外交など様々な状況で、人間関係の衝突を回避したり摩擦を軽減したりすることができるかもしれない。つまり、危機言語でも、英語や日本語のような話者数が多い言語でも、その語彙に反映した知識や世界観は、人類が直面する問題に対して多様な解決策を提供してくれる可能性があり、人類全体に対して普遍的な価値を有するかもしれないのである。これこそが危機言語を維持すべき重要な理由の一つである。次章では、この点を沖縄語の親族名称の意味や用法を分析することで、さらに明確に示すことにする。

5. 沖縄語の親族名称と文化的知識

5.1 沖縄語の親族名称と「ウウナイ」

前章で述べたように、言語の語彙には、その話者たちが長い期間に渡って大切にし、次世代に伝えてきた文化的知識が反映している。したがって、言語が消滅すれば、そのような文化的知識は途絶えてしまう

のである。本章では、そのような文化的知識を反映した語彙の事例として、沖縄語の親族名称「ウウナイ」及び沖縄語の親族名称を並置する際の語順に関わる現象を取り上げ、それらに反映した沖縄固有の文化的知識を考察する。なお、すでに注5で述べたように、「ウウナイ」の表記は「キナイ」「をなり」など様々あるが、本稿では、他の文献からの引用の場合を除き、『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』に従って「ウウナイ」と表記する。

世界各地の親族名称の研究は、これまで言語学や文化人類学の分野で数多くなされている。親族名称の分析から、私たちはどのような事が理解できるのだろうか。中本（1983）によると、親族語彙は、老若男女などの生長過程的、生理的側面、社会的な地位、階層の側面などを表す「人間関係語彙」に属しており、このような人間関係語彙のうち「親族という一つの意味分野における語彙」である。そして親族語彙には、名称（reference terms）の用法と呼称（address terms）の用法がある。また、中本は「親族」を「血のつながりのあるもの、またはこれと婚姻関係を結んだものの集まり」と定義し、この親族という大きな社会集団から、社会生活に有要な概念だけを認識し、それに与えられた語が親族語彙となると説明している。そして親族語彙の構造は、社会生活のありようの差、つまり集落、家の構成、祭祀儀礼の構造などの社会構造の差によって異なるものであるとも述べている。例えばHudson（1996）によると、オクラホマ州やフロリダ州のセミノールインディアン、トロブリアンド諸島の住民など様々な社会で、一つの語が「父」「父の兄弟」「父の姉妹の息子」「父の母の姉妹の息子」「父の姉妹の娘の息子」「父の父の兄弟の息子の息子」「父の父の姉妹の息子の息子」という親族関係を表すという。このような語をどう解釈するかは研究者によっていくつかの見解があるが、Crystal（2004）が述べているように、この語は「社会的地位と責任の点で同等の男性たちの集団」を指していると考えることができる⁽⁸⁾。このように親族名称には社会生活のありようが反映するのである。

以下では、中本（1983）の調査に基づき、沖縄語の親族名称、特に「きょうだい」の関係を表す語を整理する⁽⁹⁾。まず、同一の親を共有する者同士をチョーデー（兄弟）という。それに「出生順」「性別」という要素が加わって、以下のようにいう。

- ・イーングワ（長子）、ナシチラー（末子）
- ・キキガチョーデー（男きょうだい）、キナグチョーデー（女きょうだい）
- ・チャクシ（長男）、ジナン（二男）、サンナン（三男）…
- チャクシキナグングワ（長女）、ジナンキナグングワ（二女）、サンナンキナグングワ（三女）…

上記のように、一般的に男きょうだいには「キキガチョーデー」、女きょうだいには「キナグチョーデー」が用いられるが、きょうだいの男女が「対」として意識される場合には、以下の別語が用いられる。

- ・キキー「ある女性の男きょうだい」（ゑけり）、キナイ「ある男の女きょうだい」（をなり）

本稿が従う『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』の表記では、キキーは「イイキー」、キナイは「ウウナイ」となる。これらの語は「名称」であり、「呼称」としては別語を用いる。以下では上記の「きょうだい」の関係を表す語のうち、男女を「対」として意識する場合に用いられる語「ウウナイ」と「イイキー」の意

⁽⁸⁾ この種の親族名称の解釈をめぐる社会的範疇論と系譜的範疇論の論争については合田（1982）を参照。ここでのCrystal（2004）の見解は、そのうちの社会的範疇論に基づくものであると言える。

⁽⁹⁾ この調査では沖縄県島尻郡玉城村奥武（オー）島の親族語彙が取り上げられている。この地域のことは沖縄語に含まれるが、武士と農民の位相差はないなど、沖縄本島中南部とは若干の違いがある。また、ここでの親族語彙の表記は中本（1983）のそれに従った。

味と用法を考察する。

『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』は、この2つの親族名称の意味を以下のように説明している。

「ウウナイ」【をなり】（兄弟から見た）姉妹。*イイキーの対。年寄りが使っていた語である。沖縄では姉妹が霊的に兄や弟を守護するという「おなり（ウウナイガミ）」信仰がある。

「イイキー」【ゑけり】（姉妹から見た）兄弟。ウィキーともいう。

同様の記述は『国立国語研究所資料集5 沖縄語辞典 第9刷』や『沖縄古語大辞典』にも見られる。

さらに次の点にも注目しておきたい。日本語では、「兄弟」と「姉妹」を並置する際には、「兄弟姉妹」のように男が先にくるが、伊波（1971）によると、「ゑけり」（兄弟）と「をなり」（姉妹）を並置する際は「をなり・ゑけり」という語順になるという。この「女・男」という語順は、「をなり・ゑけり」に限ったことではなく、次のような親族名称に関わる熟語にも現れる。（日本語、琉球語の順に表記する。）

男女	winagu-wikiga (yinagu-yikiga)
雌雄	mîmun-wûmun
夫婦	mîtu（めをと）
甥姪	mîwikkwa
祖父母	fâfuji

5.2 「ウウナイ」と「ウウナイガミ」信仰

本節では、前節で述べた沖縄語の親族名称の意味と用法に反映している文化的知識について述べる。まず「ウウナイ」と「イイキー」の関係には、「ウウナイガミ」信仰が息づいていると考えられている。以下に『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』による「ウウナイガミ」の定義を挙げる。

「ウウナイガミ」 おなり神。沖縄では、姉妹は霊力をそなえていて、その霊力で男の兄弟を守護すると信じられている。兄や弟が旅立つときは姉妹がその安全を神に祈った。

また、伊波（1971）はこの信仰について以下のように記述している⁽¹⁰⁾。

……その遠い別れなる南島人の間にも、現に彼等と共に生活してゐる人をそのまゝ神として崇める風習が遺つてゐる。〈中略〉其処では今なお、一切の女人が、其兄弟等に、「をなり神」として崇められてゐる。〈中略〉かうして彼女等には、神秘力があると認められてゐたのだから、故郷を離れた男子には、をなり神が始終つきまとつて、自分を守護して呉れるといふ信仰があつた。

伊波（1971: 373-374）

この信仰に関連する琉歌や沖縄の風習、祭事は数多くあることから、この信仰がかつては沖縄の人々の生活の中に息づいて大切にされていたことがわかる。「ウウナイ」という語の意味にはこのような沖縄独特の信仰が反映しているのである。

このような「ウウナイガミ」信仰に基づく「ウウナイ」と「イイキー」の関係は、沖縄文化圏で重視されてきたわけだが、『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』が示しているように、これらを表す語は高齢者の間でのみ使われていたものであり、現在ではほとんど使われなくなっている。2015年に沖縄県が作成した『し

⁽¹⁰⁾ 伊波（1971）は「ウウナイガミ」を「をなり神」と表記している。

まくとぅば教本』においても、2019年に読谷村が作成した『読谷村のしまくとぅば 子どもの成長』においても、親族名称を示した部分にこれらの語の記述は見られない。また本稿筆者による、同村で生まれ育った50代の人に対するこの語に関する聞き取り調査で得られた回答は、「ウunnai」という語を「聞いたことがある」というものであった。しかし、一般の戦前生まれの人やしまくとぅば継承活動をしている戦前生まれの人に対する聞き取り調査では、この語を「使うことがある」という回答が得られた。

また、親族名称が並置される際の「女・男」という語順にも、「ウunnaiガミ」信仰及び女性に神秘力を認める風習が反映していると考えられる。このような、女性を男性よりも上位に置く風習は古くから琉球に定着していたようであり、伊波（1971）によると、琉球では男神よりも女神のほうが上位であり、それに伴って男神に仕える尸婦おみけりおこでより、女神に仕える尸婦おみなりおこでのほうが上位とされている。また伊波は、祭政一致時代の琉球では男子は政治に携わり、女子は祭事に携わったため、女子の権力が強かったことを指摘している。さらに、この点に関して勝方＝稲福（2010）も「とりわけ沖縄は、民族宗教における女性祭祀者の優位性が現在でも残っている世界的にも珍しい地域であると同時に、儒教的な男系原理の影響が強い地域でもあり、その並存や矛盾が独自のジェンダー観を形成している」と説明している。これらの先行研究から、かつての沖縄では「ウunnaiガミ」信仰と共に女性を男性よりも上位に置く風習が生活の中に息づいて大切にされていたことが分かる。そして、これらの文化的知識が沖縄語の親族名称の意味と用法に反映していると考えられる。

しかしこうした沖縄独自の文化的知識は、沖縄がたどった廃藩置県、近代化、沖縄戦、アメリカ統治、日本復帰という社会的文脈では、その価値が理解され難かった。勝方＝稲福（2010）は、近代合理主義の思想が入ってきたことで、沖縄で育まれてきた文化やその価値観が不当に低い扱いを受けるようになったこと、神歌やおもろや琉歌を彩ったことばが、下品な「方言」に貶められたことを指摘している。沖縄語がこのまま消滅してしまえば、それに反映した独自の文化的知識や世界観も失われてしまうだろう。しかし上で説明した沖縄語の親族名称が表す世界観は、現代の女性のあり方を問い直す視点を与えうるものである。次章では、このような視点と今後の沖縄語維持活動についての展望を述べて、本稿の結論としたい。

6. 結論と今後の課題

沖縄語及びその他の琉球諸語維持のための取り組みにも関わらず、2013年と2017年に沖縄県が行なった「しまくとぅば県民意識調査」では、「しまくとぅばに対する親しみ」は1回目の調査で肯定的な回答をしたものが80.3%だったのに対し、2回目の調査では78.4%となっている。「しまくとぅばに対する理解度」については、1回目の調査で「よくわかる・ある程度わかる」と回答したものが68.4%だったのに対し、2回目の調査では63.8%となっている。また、「しまくとぅばの使用頻度」「普段の生活の中でのしまくとぅばの必要性」といった項目でも肯定的な回答に若干の減少傾向が見られる。

上で述べたように、2回目の調査では、1回目の調査から割合は減ってはいるものの、県民の78.4%がしまくとぅばに「親しみを持っている・どちらかといえば親しみを持っている」という肯定的な回答をしている。それにもかかわらず、なぜ琉球諸語の維持活動は成果を出せないのだろうか。

一つの大きな要因として、琉球諸語は継承が途絶えた言語であるということが挙げられる。新しい世代にとっての母語は日本語であり、沖縄語あるいは他の琉球諸語を流暢に話せるようになるには第二言語習得と同等の時間を割かなければならない。つまり言語を普及・継承するには「積極的に話しましょう」という程度では不十分なのである。また、方言札の使用に典型的に見られるように、これらの言語を母語として学んだ世代が、学校教育の中で自身の言語は劣ったものであるとの認識を植え付けられたことも大きな要因である。以上のことから、琉球諸語を話せる世代と継承が途絶えた世代に対して、言語意識の向上及び言語使用増加のために別々の対策が求められる。

次に言語の多様性の問題がある。琉球諸語として6つの言語が認められ、沖縄語の中にも複数の変種があり、母語話者同士であれば話し方でどこの字出身かまで分かるという。沖縄語の教材が扱っていること

ばも『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』では「那覇方言」であるし、西岡・仲原（2000）では「首里の方言」であるというようにばらつきがある。それ故に、言語の普及・継承を行うには、どの地域のどの変種を採用するのかによって言語間に優劣が生まれ、言語内の多様性を失わせてしまう可能性があるというジレンマを抱えている。

また、正書法が確立していないことも問題となっている。沖縄語をはじめとする琉球諸語には日本語にはない発音が見られ、これらを日本語で表記するには工夫が必要である。しかし正書法が確立していないために、教材によってカタカナで表記されていたり、異なる漢字が当てられていたり、学習者になじみのない記号が付与されていたりする。これによって学習者が戸惑うことになる。

さらに、上で述べた諸問題を解決するための統括的な機関が存在しないために、琉球諸語の普及・継承を目的としたシンポジウムや講演会等で、毎回同じような議論が研究者や関係団体、行政の間で繰り返されていることも維持活動の問題点であると言える。

上記の問題を解決するためには、琉球諸語の母語話者である祖父母の世代、琉球諸語を聞けばわかるが流暢に話すことはできない親の世代、聞くことも話すこともほとんどできないそれより下の世代、さらには琉球諸語の普及活動に携わる人たちが、この言語が消滅することが何を意味するのか、その消滅によって何が失われてしまうのかということについての意識を強く共有することがなにより必要である。本稿では、そのような「言語の消滅とともに失われてしまうもの」の一例として、沖縄語の親族名称に反映している沖縄文化固有の親族観や女性観を考察した。洋の東西を問わず長い女性差別・女性蔑視の歴史を経て、近年、男女同権の意識が高まっているが、「ウツナイ」という語に反映している「ウツナイガミ」信仰や、男女のペアを表す「をなり・ゑけり」などの熟語の語順からわかるように、沖縄では古くから女性に神秘力を認める風習があり、女性には重要な社会的・祭事的役割が与えられてきた。このような、男性にはない女性特有の能力に対して社会が高い価値を与えるという態度は、現在の男女同権の考え方に通じるものがある。沖縄語だけでなく、その他の数多くの危機言語及びそれによって次世代に継承されている民族固有の文化には、今後人類が環境問題、社会問題、民族問題等の困難な問題に直面した時に、その解決の糸口となるような知恵や知識が含まれている可能性がある。これこそが、危機言語を維持すべき最も重要な理由であり、また、危機言語を維持するために活動している人たちが常に意識していなければならないことである。

参考文献

- Crystal, David (2000) *Language death*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- 土居健郎 (1971) 『甘えの構造』 東京: 弘文堂.
- Evans, Nicholas (2010) *Dying words: Endangered languages and what they have to tell us*. West Sussex: Wiley-Blackwell.
- 合田濤 (1982) 「親族名称と親族の認識」 合田濤 (編) 『現代の文化人類学第1号 認識人類学』 163-193. 東京: 至文堂.
- Harrison, K. David (2010) *The last speakers: The quest to save the world's most endangered languages*. Washington, D.C.: the National Geographic Society. 川島満重子訳 (2013) 『亡びゆく言語を話す最後の人々』 東京: 原書房.
- 外間守善 (2000) 『沖縄のことばと歴史』 東京: 中央公論新社.
- Hudson, R. A. (1996) *Sociolinguistics*. Second edition. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- 伊波普猷 (1971) 「をなり神」 大藤時彦・小川徹 (編) 『沖縄文化論叢 (全五巻) 第二巻 民俗編 I』 373-384. 東京: 平凡社.
- 石原昌英 (2010) 「琉球語の存続性と危機度 逆行的言語シフトは可能か」 パトリック ハイニンリッヒ・松尾慎 (編著) 『東アジアにおける言語復興 中国・台湾・沖縄を焦点に』 111-149. 東京: 三元社.

- 勝方＝稲福恵子（2010）「「うない（姉妹）」神という物語」西川潤・松島泰勝・本浜秀彦（編）『島嶼沖縄の内発的發展 経済・社会・文化』257-271. 東京: 藤原書店.
- 九鬼周造（1979）「「いき」の構造」『「いき」の構造 他二篇』5-98. 東京: 岩波書店.
- 宮良信詳（2010）「沖縄語講師の養成に付いて」パトリック・ハインリッヒ・松尾慎（編著）『東アジアにおける言語復興 中国・台湾・沖縄を焦点に』179-201. 東京: 三元社.
- 中本正智（1983）『琉球語彙史の研究』東京: 三一書房.
- Nettle, Daniel and Suzanne Romaine (2000) *Vanishing voices: The extinction of the world's languages*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- 新永悠人・石原昌英・西岡敏（2014）「北琉球諸語（奄美語・国頭語・沖縄語）の存続力と危機度」下地理則・パトリック・ハインリッヒ（編）（2014）『シリーズ 多文化・多言語主義の現在6 琉球諸語の保持を目指して 消滅危機言語をめぐる議論と取り組み』96-142. 東京: ココ出版.
- 西岡敏（2013）「「沖縄語」概説」沖縄大学地域研究所（編）『琉球諸語の復興』65-85. 東京: 春書房出版.
- 西岡敏・仲原穰（2000）『沖縄語入門 たのしいウチナーグチ』東京: 白水社.
- Thomason, Sarah G. (2015) *Endangered languages: An introduction*. Cambridge and New York: Cambridge University Press.
- 唐須教光（2007）『英語と文化－英語学エッセイ』東京: 慶應義塾大学出版会株式会社.
- Wierzbicka, Anna (1997) *Understanding cultures through their key words: English, Russian, Polish, German, and Japanese*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- Wierzbicka, Anna (2006) *English: Meaning and culture*. Oxford and New York: Oxford University Press.
- 山田孝子（1994）『アイヌの世界観』東京: 講談社.
- 読谷村史編集室（編）（2019）『読谷村のしまくとうば 子どもの成長』沖縄: 読谷村役場.

参照辞典類

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）（1992）『言語学大辞典 第4巻 世界言語編（下－2）』東京: 三省堂.
- 国立国語研究所（編）（2001）『国立国語研究所資料集 5 沖縄語辞典 第9刷』東京: 財務省印刷局.
- 沖縄古語大辞典編集委員会（編）（1995）『沖縄古語大辞典』東京: 角川書店.
- オースティン, ピーター・K.（編）澤田治美（日本語版監修）（2009）『世界言語百科 現用・危機・消滅言語1000 ビジュアル版』東京: 柊風舎.
- 佐藤武義・前田富祺（編集代表）（2014）『日本語大事典 下』東京: 朝倉書店.
- 内間直仁・野原三義（編著）（2006）『沖縄語辞典 那覇方言を中心に』東京: 研究社.

参照資料

- 文化庁（2018）「危機的な状況にある言語・方言サミット（宮古島大会）資料集」
- 沖縄県（2017）「しまくとうば県民意識調査 報告書」

参照ウェブサイト

- Eberhard, David M., Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.) (2019) *Ethnologue: Languages of the world, twenty-second edition*, Dallas, Texas: SIL International, online version. <http://www.ethnologue.com>. [accessed September 2019]
- 沖縄県（2017更新）「「しまくとうば普及推進計画」及び「しまくとうば普及推進行動計画」について」
<https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/keikaku.html> [2019年9月アクセス]
- 総務省（2019）「住民基本台帳に基づく人口、人口動態及び世帯数」
http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/daityo/jinkou_jinkoudoutai-setaisuu.html [2019年9月アクセス]
- UNESCO (2010) *Atlas of the world's languages in danger*. <http://www.unesco.org/languages-atlas/index.php>